

## 門前町集落の形成とその変容

——大社町を事例として——

柳 楽 ひとみ

日本には、多くの神社・仏閣が存在し、古くから日本人の精神生活と結びついている。一般には、集落の中であって、その集落構成員の信仰の対象となっているのが基本的であるが、そのうちのいくつかの神社あるいは寺院は、集落の境界を越えて、広く全国的に信仰を集めている。そうした社寺の門前には、参詣客を対象として旅館、飲食店、土産物店、娯楽施設等が立ち並び、特色ある景観を見せている。これが門前町である。

本論文では、出雲大社とその門前町・大社町を対象として、全国的な信仰圏を持つ神社を抱える集落の特色を考察することを目的とした。

出雲大社は、『記紀』の時代から朝廷に重んじられ、伊勢神宮と並んで格式の高い神社であるが、それは、裏返せば、一般の民衆からは遠い存在の神社であったことを示す。祭祀は、平安時代初期に、意宇地方（現在の松江市付近）から移ってきた出雲国造家によって行われ、中世までは、国造家とそれに仕える社人達によって信仰されていたにすぎない。

それが、中世末以降、全国的な信仰を集めるようになったことについては、御師による布教に負うところが大きい。御師とは、各地へ出かけて信者を獲得し、神札配布や祈禱を行い、また信者が大社へ参詣する場合にはその宿泊の世話をする等、信者と密接に結びついていた神職の称号で、伊勢神宮等にも存在した。現在広く知られている出雲大社＝福の神とか、出雲大社＝縁結びの神といった性格づけも、多くはこの御師によって広められたものと見られる。

こうして全国的に出雲大社の信仰圏が形成された近世は、一方で民衆の生活も安定し、物見遊山を兼ねた社寺参詣が活発化した時代でもあった。出雲大社にも多くの参詣客が訪れ、門前には、そうした人々を相手にした旅館・土産物店等の商業

機能が備えられるようになってきた。それまでの門前集落は、近隣からの物資の集散場としての市場町、また水上交通の拠点としての港町といった色彩が強かったが、ここにきて新たに門前町という性格が加わり、やがて、これが集落全体の性格を規定する名称となっていったのである。

集落は、参詣道に沿って人家の並ぶ街村の形態をとり、その参詣道の変遷や近世初期に盛んに行われた新田開発の影響を受けて、放射状に、そして南東方向に拡大していった。内部の門前町機能も、参詣道の変遷に伴ってその中心は移動し、古い参詣道沿いの地域は、一般の商店街や住宅地に変わっている。

しかし、近年のモータリゼーションの発達によって、参詣客は、自家用車で直接出雲大社横の駐車場まで乗りつけるため、その周囲の商店ばかりが賑わい、参詣道沿いの商店街は、衰退の一途を辿っている。このように、門前町機能を担うことで経済的利益を得る地域は、非常に狭い範囲に限られてきているのである。

このことは、大社町全体における出雲大社の経済的価値が低下していることを意味する。そして、出雲大社とその門前集落の住民との経済的結びつきをも弱めることにつながっている。

ところで、出雲大社は、歴史的に国家との結びつきが強く、その結果として、門前集落の住民との精神的結びつきは、一般の集落の住民とその氏神との結びつきに比べて希薄であった。近世以来、門前町と出雲大社との結びつきは、経済的なものが中心だったのである。これは、全国的な信仰圏を持つ多くの社寺の門前町について、共通して言えることである。

しかし、近年、その経済的結びつきさえ弱まりつつあるという事実は、大社町＝門前町という性格づけにも、大きな問題を投げかけている。